

もんの織物も著す、典侍はさいの目、内侍、命婦は筋なり、いづれも白地也、筋は黒紅いとなり、又地赤白の綾にして、黒紅糸のすぢあるも、織筋ちがひては、典侍、内侍、命婦いづれも用ゆ、うらもあかのおもてほどはあかく、白き所は白うらすぢをあはせてもちゆ。○中 御さしは命婦の末につきて、はつきはかまをゆるされず、玄モロコシの織もの綾そよはりをつくる小そで也、大ひとへは、常にはひとへといふて、いなり、もえぎの絹、こしより下にきるなり、としよりたる人は小すべらかしにてもゆり給ふ、大すべらかしさほうの事也、常には小すべらかし長かもじ、小そでの上に袴也、御さほうの時ははつき也、大すべらかしにはびん出るなり、まへがみのほとりより、地がみながきをすこし出しさぐるなり、院の御所にても、御さほうおなじ事也、常ていかはれり、さげがみて、いに長かもじ也、御膳のときははかまなり、女御といふうちは典侍の上につき給ふ、中宮といふよりべち座なり、御上と同じ事也、夫ゆゑ女中のめしつかはるゝ、禁中院中と女御のうちは、上臈はめしつかはるゝにも、その外は女中といふもあらず、かるき女を御こせうとてめしつかふ、女中といふよりは、禁中の女中と打まじりて、玄モロコシだいに座もきはまりぬる也、天盃天酌もたまふ。

〔嘉永年中行事〕正月朔日朝の物、四方拜をはりて、常の御座にて、朝の物、菱花びら、梅干、御茶など供じて御盃参る、御前にて御とほしあり、伊與酌を勤む、其やう先三つ肴、菱花びら、きじ茶、硯蓋の御肴にて一獻を供す、加へ親王、女御、御相伴なり、天盃親王、女御へ給ふ、女御より次第に御とほし、女中も内侍の限りは、御前にて菱花びら、きじ茶を給ふ、命婦はおのづく末座の内侍のほとりへ進み出で給ふ、同所にて御膳供す、朝女中のうけとり進上ある日は、定れる御盃は供せず。○中

御祝秉燭の後御祝あり。○中 御引直衣脱せ給ひて、御小袖に赤き生の御袴、垂纓御組懸は本の儘にて、西の一帖の御座に移らせ給ふ、御陪膳以下各五つ衣をぬぎ、常の小袖に袴ばかりにて座に著く、先御陪膳母屋をへて中段に進み、御座の右の方北へそはして候す、御手長下段に候す、次